

浄瑠璃作品要説

〔5〕

西沢一風・並木宗輔 篇



浄瑠璃作品要説〈5〉

西沢一風・並木宗輔 篇

昭和六十三年三月三十一日

編集者 国立劇場芸能調査室
発行人 特殊法人 国立劇場

東京都千代田区隼町四一
〒102 電話〇三(二六五)七四一一
印刷所 株式会社 キンコー

東京都港区虎ノ門五一―一六
〒105 電話〇三(四三二)四七六一

浄瑠璃作品要説

〔5〕

西沢一風・並木宗輔 篇

国立劇場芸能調査室

目次

(凡例)

井筒屋源六恋寒晒	9
建仁寺供養	16
頼政追善芝	28
女蟬丸	44
昔米万石通	56
南北軍問答	62
身替弭張月	75
大仏殿万代石楚	87
北條時頼記	99
清和源氏十五段	111
摂津国長柄人柱	123
尊氏將軍二代鑑	132

南都十三鐘	142
後三年奥州軍記	155
藤原秀郷倭系図	163
蒲冠者藤戸合戦	173
本朝檀特山	187
楠正成軍法実録	196
源家七代集	211
和泉国浮名溜池	220
赤沢山伊東伝記	228
待賢門夜軍	237
忠臣金短冊	246
秀伶人吾妻雛形	258
那須与市西海硯	266
南蛮鉄後藤目貫	278
万屋助六二代禰	287

荳桑門筑紫轢	294
和田合戦女舞鶴	303
安倍宗任松浦簗	312
釜淵雙級巴	321
丹生山田青梅劍	328
茜染野中の隠井	340
奥州秀衡有髻婿	347
狭夜衣駕鵞劍翅	357
鷗山姫捨松	370
石橋山鎧襲	380
百合稚高麗軍記	393
道成寺現在蛇鱗	405
軍法富士見西行	417
夏祭浪花鑑	428
楠 昔 嘶	439

源平布引瀧	455
文武世繼梅	471
日蓮上人御法海	485
一谷嫩軍記	498
西沢一風 付田中千柳	514
並木 宗 輔	522
並木宗輔参考文献年表	546
吉永孝雄	514
吉永孝雄	522
服部真人	546
劔持典子	

(凡 例)

一、本書には正本に作者名として西沢一風の名の見える八作品、西沢一風・並木宗助両名の名の見える一作品、並木宗助(宗輔又は千柳)の名の見える四十三作品、計五十二作品のうち、当叢書へ4、竹田出雲篇所収の六作品(菅原伝授手習鑑)「傾城枕軍談」「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」「粟島譜嫁入雛形」「双蝶々曲輪日記」を除く四十六作品を収めた。

一、内容の配列はまず「作品名(内題に拠る)」「訓み」を挙げ、次いで、「時代・世話の別」「段(巻)数」を示し、以下「作者」「名称」「題材」「梗概」「初演」「構想・価値」「諸本」「主要登場人物一覧」の順に並べた。作品により「影響」「評判」等の項を設けたものもある。

一、梗概については、単に筋だけを追わず、どこでどの人物が何をしたか、どこにどのような趣向が盛られているかが解るよう心がけた。

一、段分けは初演時の番付が解っているもの(『義太夫年表近世篇』に拠る)は番付に拠り、そうでないものについては、初演当時に近いと思われる段分けを、執筆者が仮に行なった。

一、段名についても、番付に段名が見えるものはそれを使用し、そうでないものについては執筆者が仮に段名を冠した。また、本来一段であるべき段を更に口・奥、中・切等と分割している場合も、可能な限り各段に名称を付したが、そうでないものについては段の初め(口、あるいは中)にだけ段名を掲げ、以下は奥とか、切とのみ記して同じ段名の重複を避けた。

一、各段の初めに引用した原文はできる限り院本に忠実を旨としたが、一部異体字を現行の字体に改めた。

一、作中の人名の中、院本の表記が前後異なる場合はいずれかに統一した。また、初演時の番付の役名については、番付の表記を尊重し、院本との統一はしなかった。

一、諸本については、『国書総目録』を基礎に、適宜執筆者が補った。また、所蔵図書館等の略称は『国書総目録』にならった。

一、主要登場人物一覧の○はその人物が登場すること、◎は特にその人物が重要な役割をはたすこと、⊗⊗はその人物がその段で死亡することを表わした。

一、この項の執筆者は左記の諸氏である。

北村 伸明	北村 優子	阪口 弘之	首藤 久仁子	白瀬 浩司
田 中 直子	土井 順一	長島 尚子	中野 真作	則藤 了
灰田 由記子	服部 真人	早川 久美子	林 久美子	山田 和人
山本 しづ江	湯川 春洋	吉永 孝雄		

特に吉永孝雄、阪口弘之両氏には本書の全般にわたって、企画から校閲まで種々の労をわずらわせた。あわせて深く感謝の意を表する。

国立劇場芸能調査室

井筒屋源六恋寒晒

いづつやげんろくこいのかんざらし

世話物 三卷 〔作者〕西沢一風・田中千柳の合作 〔名称〕元禄から流行した売薬行商人を井筒屋源六と言ったが、本作の主人公佐々木源六が勘当され、この行商人となつて登場する（上之巻）ことと、武士である源六が恋のために寒晒（奴などのように尻を端折った貧寒な者を罵る語）の中間姿となる（中・下之巻）ことを効かせて外題とした。

〔題材〕

源六は主君の愛妾おらんと密通したため勘当され、伊勢の神官である伯父親子の厚意により、従妹と結婚するが、おらんの事が忘れられない。従兄八十之進とともに京に上つた源六は偶然おらんと再会する。おらは源六の借金調達のため愛想尽かしを言うので、誤解した源六はおらを殺し、その本心を知つて跡追ひ心中をする、という愛想尽かしの典型である。おらが八十之進に源六への愛想尽かしを語るのを、源六が立聞くと言う趣向は、近松の『心中天網嶋』河庄の段の影響かと思われる。以後この「愛想尽かし」の趣向は、様々な形に変形、発展して行く。実説については、何か原拠になつた事件があるかも知れぬが、不明。

〔梗概〕

上之巻 （佐々木源太兵衛内の段）「地中皐月雨ふりし昔を。けふとへば。すなはち則けふが其むかし。播磨地ウの領主に宮づかへ。……」より

播磨の領主に仕える佐々木源太兵衛の屋敷では、折から端午の節句とて、門口に幟をたて、内では女中達が粽ちまきを巻いている。茶の間女中のおせりがあれこれ指図がましくしゃべりちらす所へ、主源太兵衛が帰る。源太兵衛は出

迎えた妻に、勘当して子供は居ぬに何故轍をたてたと叱りつける。妻が勘当を許してくれるように詫言をするが、源太兵衛は聞入れず、人でも杭でもない奴、見つけたら一討ちにとべもなく言い放ち、妻を伴い奥へ入る。

勘当の身の源六は菓の引売りになり、門口で母に合図の声を張上げる。女中が呼びに来ると、源六は供の弥助に町中へ菓を売りに行かせ、自分は内に入る。涙ながらに立出た母は、父に詫言したが聞入れられぬと語り、聞いた源六も泣き沈む。時に轟伴之丞が訪ねて来て案内を乞うので、源六は身を忍ぶ。伴之丞は出迎えた源太兵衛に、この度の御用金の立割金を源太兵衛の支配村が出さないで、きつと言いつけるようにと言わせもたてず、源太兵衛は算盤勘定はそこもとのように町人から成り上がった者のする奉公、いざと言つ時殿の命にかわる奉公をする自分に言うのは筋が違つと言いつ放つ。怒つた伴之丞は隠れていた源六を引出し、娘おらんをどこへ遣つた。折角殿のお手付になりながら、お前と密通して出奔したため当てが外れたと、打ち打擲する。折節妻の甥、街八十之進が暇乞いの為に来かかつて源六を庇い、おらんは必ず自分が探し出すので、それまで源六は自分が預かると割つて入る。捨台詞を残して帰る伴之丞を呼止めた源太兵衛は、勘当した源六は他人、他人を断りもなく人の門内で打擲するは礼儀知らずと、刀の峰で散々に打ち据える。八十之進に引起こされ、伴之丞は逃げ帰る。母は八十之進にくれぐれも源六のことを頼み、これが永の別れとなるとも知らず、親子は別れ行く。

中の巻 口、(伊勢巡りの段)「いづくはあれど。神かせやしきなみよするいせのくに。六十余州に生をうけあは万石の人のかず。……」より

伊勢参宮の人々を案内して回る数多の道者の中へ、客の一人が八升太夫方の源六は居ぬかと尋ねて来る。源六が自分と答えると、男は町内の三島屋から預つたと手紙を渡す。上書を読んでおらんからの文と知り喜んだ源六は、また客を案内して天の岩戸の方へ行く。

奥、(八升太夫内の段)「されば紅粉しほりやの手はあかくた^{地色中}とんやの手はくろし^{ハル}とかや。神にそまれば心まです^中

くなる道の街氏。……」より

伊勢の御師、街八升太夫の屋敷。伊勢へ来てから三年が経ち、源六は八十之進の妹政野と夫婦になっている。玄関脇の中広間に人の居ないのを幸い、源六が最前受取った文を読んでいると、女中のおすてが見付けて、政野に言いつけるとからかい、走り行く。読み終った源六は、文を口に押し込み、万度の祓を取って封じ目を破り、内の大麻を取り出して代りに何か白紙に包んだ物に文を添えて押し込み、封じ目を元のようにする。玄関から頼もうの聲に、口に紙を押し込んだ源六は答えられず、台所へ行く。御師仲間の四郎九郎太夫を八十之進が出迎え、諸国へ配るお祓いが遅れているので、至急に発ちたいがなるべくなら同道しようと相談し、今夕松坂で会う約束をして四郎九郎太夫は帰る。八十之進は妹政野を呼び、旅の支度を命じ、人の居ぬを幸い、怪気をつつしんで源六と仲良くすれば源六の勘当もゆるると妹に意見し、奥へ行く。政野がお梅、おすてを呼んで挾箱に兄の旅仕度を整えるうち、下人六介が源六に頼まれた万度のお祓を旦那の挾箱に入れてほしいと政野に渡す。取り上げて上書がおらん宛になっているのを見た政野は、兄を呼んで見せる。驚いた八十之進が中を開けて見ると、大麻の代りに女物の足袋と文。驚き呆れる所へ父八升太夫が来て見付ける。怒った八升太夫は、源六を呼び付け、恐れ多い万度の祓の中になぜ足袋を入れた、罰当り奴と罵る。兄、妹が慌てて言訳をするが、身の誤りに源六は言葉もない。八升太夫は、八十之進が伯母に頼まれ、心を尽くして面倒を見、妹の聲にしたのもおらんをわすれさせる為、その志を無にしたと涙ながらに叱る。源六は大声を上げて泣き、詫びる。暫し思案した八升太夫は、許す代りには下人六介の纏袍を着て八十之進の供をせよ、八十之進は女を捜し出して三つ金輪で縁を切って帰れ、さもなければ髯舅の縁を切ると言う。源六は喜んで女房に纏袍を持って来させて着替える。八升太夫は涙ながらに女と縁を切って故郷に錦を飾れと諭し、二人の発つを見送る。

下の巻 口、(伊賀屋の段)「へ行空や。都の花を。ちらさじと。爰に扇の風こめて。五条通に一かまへ。扇折手の

品^シかたち。……」より

扇折甚阿弥宅、伊賀屋の店先。手代八兵衛が送り状を書き、出入の与次右衛門が駄荷造りをしている所へ、伊勢からの荷が届く。八兵衛は中居のおらんを呼び、伊勢から街八十之進という客が追付け見えるので、食事、湯の仕度をしておくように命じる。やがて八十之進と中間姿の源六が到着し、八兵衛は八十之進を案内して奥へ行く。茶を汲んで出たおらんは源六と知って驚き、互いに再会を喜び合う。折手どもが二人は一家か、不思議な縁と声をかけるので、おらんは一門のようなものごまかす。後ろで立聞いている八兵衛は、おらんに密かに恋慕しているため、無駄話をするなど苦口を言う。内に入ろうとする源六を呼止めた石灰屋の土右衛門は、自分を見忘れたかと門口に引出して打ち打擲、以前親に勘当された時、百五十匁あれば勘当も許され、二百石の跡取りになると言うので百五十匁貸したのを、何故勘当の許りぬまま伊勢へ行く時に断って行かぬと罵りつつ踏む。止めに入ろうとするおらんを八兵衛が後ろから抱き止めて動かさぬ。散々に踏み付けた土右衛門は、言い分あらば元の住居にいたい捨てて立帰る。走り出た八十之進はよく我慢したと源六を誉め、八兵衛から百五十匁の金を借り、これを返して来いと与え、自分の脇差を抜いて渡し、これを自分と思い必ず抜くなど論ず。源六は喜びいさんで出て行く。

夕刻。片息をついて帰って来た源六におらんが首尾を問うと、源六は途中で金を落とし、先方へ行って払おうとすると金がないため、またたかれたと無念涙にくれる。おらんを付けまわす手代八兵衛がぐくり戸より顔を出し、そなたの心次第で金の思案は成るものをと、手を取って内へ引入れる。

奥、(奥座敷の段)「遠^{ウツ}かねの。茂^{ハル}右衛門女房^メはよいよめ^{ハル}ご。あれ見^{ハル}さいな。つく^{ハル}ばの山^{ヤマ}のよこ^{ハル}ごも。よこ^{ハル}ごもの。……」より

母屋では旦那甚阿弥が大坂へ行って留守を幸い、使用人共が小歌、ものまね、浄瑠璃などで楽しんでいる。奥座敷で明日の手配をする八十之進の所へ、下女おせき、下男七兵衛らがお慰みにと呼びに来るが、八十之進は疲れた

のを理由に断る。中居のおらんが銚子、盃を持ってしおしおと奥座敷へ向かう。八兵衛は百五十匁の金を見せびらかしつつ、源六と縁切ると言えば金をやると、おらんの跡を慕い行く。おらんを奥座敷に入らせた八兵衛は縁で立聞く。おらんの様子を不審に思つた源六は、庭の井戸の陰に隠れて様子を窺う。八十之進は何も知らず、源六が帰つたら世話を頼むと語る。おらんは自分の身の上を明かし、先の見込みがないので源六と縁を切りたいと言う。八十之進は喜び、実はこの度源六を同道したのは、おらんを捜して三つ金輪で縁を切るためと明かし、源六は妹と祝言させたと言ふ。聞いたおらんが腹を立てるので、八兵衛はこれでは行かぬと座敷に入り、九間あたりへ出かけたやうと八十之進を誘い出す。跡におらんは、源六に妻があると知つて心乱れ、その場に泣き伏す。井戸の陰にいた源六は、おらんが心変りしたと思ひ込み、縁先にあつた爛鍋の酒を飲んで氣を落ち着け、駆け込みざま横なぐりに切り付け、源六殿はやまるまいと言うおらんの声も聞かず鳩尾を突く。抜こうとする刀を押えるおらんに、源六はようも縁を切つてほしいと頼んだなど罵る。おらんも源六が祝言して縁切りに来たのを恨み、八兵衛に金を見せられて百五十匁の金欲しさの縁切りと本心を明かす。初めておらんの心中を知つた源六は、上衣の襟に縫い込んだ政野への去状を見せ、自分も腹切つて心中すると言う。おらんは、心中しては八十之進や親館に迷惑がかかる、やっぱり意趣切りにしてと言ひ置いて息絶える。勝手では何も知らず寔たけなわ、源六は腹を突き、井戸まで行つて釣瓶の水を飲み、そのまま息絶える。世上には心中とも意趣切りとも、様々に噂の種となる。

〔初演〕

享保八年（一七二三）七月六日初日、大坂豊竹座初演。（『世話浄瑠璃大全』に拠る。）初演時の番付は伝わらない。

〔構想・価値〕

主君の妾おらんと密通した佐々木源六が、自分と名の同じ薬売り井筒屋源六となつて我家に入り込む上之巻から、

〔主要登場人物一覽〕

お ら ん	与次右衛門	下人 六介	娘 政野	街 八升太夫	御節四郎九郎太夫	〃 お梅	女中 おすて	伊勢参りの客	街 八十之進	轟伴之丞	弥助	女中 おせり	源太兵衛 妻	〃 源太兵衛	佐々木 源六		上之巻
								○	○	○	○	◎	◎	◎	○		中 之 巻
		○	◎	◎	○	○	○		◎						◎		奥
◎	○								○						◎		下 之 巻
⊗									○						⊗		奥

中之巻では八十之進親子の世話で道者となり、さらに中間姿となって下之巻へとつづく。主人公が巻毎に形を変えするというのは世話物では珍しく、またその変わり方にも不自然さがなく、面白い。舞台も播磨の武家屋敷から伊勢へ、さらに京の扇見世と変化に富んでいる。また、伊勢の御師の家らしく、万度の祓に恋文を入れる趣向も面白い。上・中之巻がしっかりしているのに比して、肝心の下之巻の筋の運びに不自然さが目立つのが惜しまれる。いきなり土右衛門が登場して、以前源六が井筒屋の道具を買うために百五十匁の金を借りていた事が明らかにされるが、いかにも唐突な感じがする。しかも、八十之進のはからいで返しに行った金を途中で落とすと言うのは出来すぎている。また、堅物の八十之進が八兵衛の勧めるままにすぐ遊びに出て行くのも不自然である。全体の構想、まともには悪くないのだが、下之巻で誤解による意趣切りへ持っていく意図が見えすぎるのである。部分的には井戸の趣向など、面白いだけ

手代 八兵衛	石灰屋土右衛門	下女 おせき	下男 七兵衛
	○		○
○		○	

に惜しまれる。

〔影響〕

誤解による意趣切りの趣向は、半二の『よみ売三巴』（明和五年）に取られており、題材の所で述べた愛想尽かしについては、『伊勢音頭恋寝刃』『桜鍔恨鮫鞘』等へと変形、発展していく。

〔諸本〕

（院本）㊦天理 ㊦阪大・東北大狩野・早大演博・大阪府・秋葉
叢書閣 ㊦世話浄瑠璃大全上・井筒屋源六恋寒晒（武蔵屋

（則 藤）